ゼリー混ぜ苦みを抑止

福岡市立こども病院の医師らが子どもの病気や治療に関する最新の知見を説明する「#子育て処方せん」。今回は、子どもに処方薬を飲ませるコツや注意点を、由留部圭伍・薬剤部長（事務代理）に聞いた。

薬の飲ませ方

同じ薬でも年齢によって処方される種類や飲ませ方は異なる。新生児から乳児までは舌が甘みに敏感なため、薬に多少苦みがあっても甘みがあれば飲んでくれる。先端が丸い専用のスポイトで与えたり、少量のミルクか母乳と混ぜてペースト状にし、頬の内側に塗りつけたりすればさらに飲みやすい。

「薬をミルクや母乳と混ぜて与えると、授乳を嫌うようになるのでは」とよく質問を受けるが、医療現場でそうした実例はほとんど見られない。

離乳食が始まってからは、ジュースやゼリーなどに混ぜて飲ませられる。氷やアイスクリームも味覚を鈍感にし、飲みやすくなる。苦みの強い抗菌薬は、チョコレート味と相性が良い。一方、酸っぱい飲み物は、抗菌薬のコーティングをはがして苦みを強くすることがある。血圧を下げる薬はグレープフルーツジュースと混ぜると副作用の原因となり、注意が必要だ。

子どもの症状が落ち着くと、薬の服用をやめてしまいがちだが、処方された日数には根拠がある。解熱剤やかゆみ止めなどの「頓用」の薬以外は、最後まで飲みきるようにしてほしい。特に抗菌薬は、服用を途中でやめて、体内に残った菌が薬の効かない耐性菌となって増殖すると、症状が重篤化する恐れがある。

由留部圭伍部長（事務代理）

「怖い手術」ゲームやロボで緩和

入院する子どもの不安をどう和らげるか――。小児医療の課題解決のため、九州大（福岡市）でデザインを学ぶ大学院生が同大病院小児外科の田尻達郎教授らと連携した授業で、医療器具をテーマにしたゲームやロボットを作った。

ゲームではタブレット端末を動かして画面上の手術室や処置室を見渡し、ジュツベエ（手術台）やタイゴン（体温計）などの医療器具を模したキャラクター「ホスピタン」を探す。子どもの収集熱に着目し、キャラの設定や器具の説明が書かれたカードも制作した。

添田翔馬さんと宮里華奈さん（ともに24歳）が「手術に立ち向かう気持ちを後押ししたい」と開発。同科の永田公二講師は「子どもの『心の準備』は大事で、治療や検査を苦痛に思う子どもを減らしたい」と期待を寄せる。

加藤万奈さん(24)は、手術室にある麻酔器などを合体させた「手術室ロボ　オペレイダー」を作った。「手術室の『怖い』印象を『かっこいい』に変えたい」と考えたという。

授業は2024年度に行われた。3人は今春、大学院を修了したが、今後もプロジェクトを継続する。授業を担当した同病院の工藤孔梨子（くりこ）講師は「研究で効果を実証したり、産学連携を進めたりして、病院での実用化を目指したい」としている。

上医療器具を模した「ホスピタン」を探すゲームの画面下医療器具を合体させた「手術室ロボ　オペレイダー」

無理強いせず、機嫌良い時に

子どもに薬を飲ませる際のポイントは、①絶対に無理やり飲ませない②なるべく機嫌の良い時に飲ませる③何のために飲む薬かを理解できる年齢になったら、分かりやすい言葉で伝える④頑張って飲めたら、大げさなくらい褒めてあげる――の四つがある。

薬を飲むことに怖さやトラウマを感じるようになると、飲ませるのがさらに難しくなる。ご褒美のシールを用意するなどし、子ども自身に「頑張って飲もう」と思ってもらえるよう心がけてほしい。

（聞き手・大森祐輔）

「#子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール（s-syaka1@yomiuri.com）へお願いします。

インタビューの動画はQRコードを読み込んでください